

ISSN 2434-9690

東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会
2020年1月

目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
[特別寄稿]	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
[対照研究]	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
[日本語研究]	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
[中国語研究]	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

現代中国語の数量詞について

A study of the quantifier in modern chinese

洪 安瀾
Hong Anlan

提要 本文主要针对现代汉语中的“数词+量词+名词”这一短语结构进行研究。在对比语言学的研究中，汉语的“数量名”结构与英语的“冠词+名词”、日语的“零格名词”形成对比，引起了广泛的关注与热烈的讨论，其间也产生了很多有影响力的论述。但是目前主流的几种论述都在尝试寻找汉语与外语，特别是与英语之间的共性，只能用于解释现代汉语中的典型句式。经考察发现，汉语的量词是由汉语的“回指结构”衍生出来的，而后才出现了个体标记、类别标记等功能。本文拟从以下两个角度进行分析：其一是“数量名”短语的相关功能；其二是“数量名”在句法层面的语义功能。

キーワード：数詞 量詞 指示的・非指示的 存在表現

1. はじめに

右側の図 1 の絵を見せ、日本語、英語、中国語でそれぞれ文を書かせると、例(1)のような表現になるとと思われる。

(1) テーブルにはリンゴがある。(作例)

There is an apple on the table. (作例)

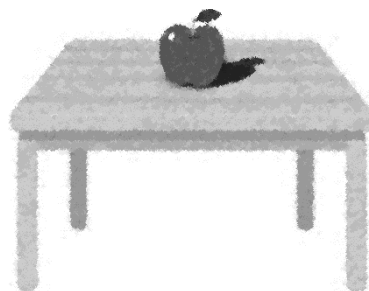
桌上有{(一)个}苹果。(作例)

文中下線部の名詞句はいずれも「リンゴ」のことを表している。日本語はガ格の名詞とともに表現するが、英語には冠詞“an”が必要である。中国語は“一个苹果”、“个苹果”、“苹果”などによって表現でき、話し言葉では、例(2)のように“一苹果”のような表現も見受けられる。

(2) ……脚不沾尘，迈马鞍子，上头有一苹果。(《中国传统相声大全》)

……(絨毯が敷かれている)足は土に触れず、馬の鞍をまたげた。鞍の上にはリンゴが一個ある。(筆者訳)

“数量词+量词+名词”の構造(“数量名”と略称)について、中国の研究者の研究では概して数量詞の“有界・无界”をめぐる検討しているが、一方、比較言語学では“一个”



などの数量詞を「冠詞」とみなす研究が多く見られる。中国語の名詞句に数量詞を好んで使うことの説明には、個体化(individualizer)、例示化(instantiation)、顕著化(saliency principle)、輪郭化(profiling)などの示唆に富む観点が出されている。しかし、それらの観点から数量詞が共起しない実例を分析するには限界がある。例えば、最古の白話小説の《水浒传》には、数量詞を用いる例文とそうでない例文とがある。

- (3) 如今前面景阳冈上有只吊睛白额大虫,天晚了出来伤人……(《水浒传》)

近頃この先の景陽岡には目の吊りあがった額の白い大きな虎が出没して、日が暮れると現れ人を殺めるのだ…(筆者訳)

- (4) 好呀! 明有王法, 暗有神明, 你如何商量这等的勾当? (《水浒传》)

おいこら! 表には法令があり、裏には神仏があるんだ。それを語るのは卑怯者のやり口だぞ!(筆者訳)

- (5) 在清溪县帮源洞中, 亦自有去处。(《水浒传》)

清溪县の幫源洞にも、そもそも逃げる場所がある。(筆者訳)

例(4)(5)は数量詞が共起しない例文である。数量詞が共起しないのは、文中の“王法”、“神明”が非個体的で、あるいは“去处”が抽象的、連続的、顕著でないとみなしてよいものだろうか。本稿では連語レベルから“数量名”構造を分析し、更にそれが文中に発揮する意味機能を調べる。

2. 先行研究及び問題点

中国の研究者の研究では、存在表現や二重目的文などに用いられる“数量名”を専ら“有界・无界”“同时量・达成量”などの問題として議論している。対照言語学の研究では、中国語の数量詞における構造上、機能上の特徴について盛んに議論がなされている。それらの研究はいずれも有益な観点を提起しているものの、中国語をヨーロッパ諸言語と照らし合わせ、共通の意味的、文法的特徴をまとめようとするきらいがある。

2.1 “数量名”の意味機能

欧米やロシアの研究の多くは中国語に冠詞がないので、意味機能が極めて近いところ¹⁾から、数量詞(特に通用個体量詞“(一)个”)を冠詞とみなしている。例えばドラゴノフ(1958:180)では、“一个”は不定冠詞、“这个”“那个”は有定冠詞と指摘している。

大河内康憲(1985:1-13)では、数量詞は類名や総称的なものを特定の個体にまとめあげる働きをしていると考えている。“一”が量詞と結んだものは広く名詞について、個別の概念を与

¹⁾ 第一に英語にせよ、フランス語にせよ、不定冠詞はすべて「ひとつ」を意味する数量表現を起源としている。第二に中国語には実数の表示の必要以上に“一个”などが生じたことから、“一个”がヨーロッパ語の不定冠詞に極めて近いことが明らかであると大河内康憲(1985:3)が指摘している。

え、抽象的なものを具体化するために働いていて、名詞をその形で範疇化する側面が強調されると指摘し、「個体化(individualizer)」の観点で中国語の量詞を分析している。

近年の研究は Langacker (1995:51) の唱える「グランディング(grounding)」機能をよく取り上げ、“数量名”を分析している。中でも中国語量詞の文法化を考察した橋本永貢子 (2014) が印象的で、その観点では中国語の量詞(名量詞と動量詞)が「空間的・時間的」な量を表し、それぞれの領域から抽象的な出来事を現実世界に位置付けると指摘している (橋本永貢子 2014:195)。もっとも、「グランディング」機能は、名詞がものの「インスタンス(instance)」ではなく、「タイプ(type)」を表しているという観点から、名詞句は例えば英語の複数を示す“s”などの文法的手段によって、「例示化(instantiation)」する意味機能を有すると考えている。即ち、中国語の名詞を英語の名詞と同一視して、その抽象的な、総称的な意味にばかり目を向けているのである。

贅言を繰り返すまでもないが、形態的類型論において孤立語に分けられる中国語は、その時間的感覚(テンス・アスペクトの特徴)が日本語(膠着語)、英語(屈折語)とおのずから異なる。中国語のゼロ格名詞句(裸名詞句)は必ずしも抽象的、総称的な概念を表しておらず、文構造を無視して名詞句の意味機能を議論しては、前節の例(2、4、5)の状況に適用できない。大河内康憲(1985:4)では「文言的修辞が人々の意識に根強く、白話表現と文言では全く異なる言語とあってよい」と指摘しているが、拙論では両者を切り離して議論しては果たして妥当であろうかと、その観点到疑念が抱かれる。

2.2 “数量名”の文法機能

文レベルで“数量名”構造を議論する研究として、最もよく取り上げられているのは“显著性原則”(古川裕 2001)であろう。古川裕 (2001:265) では、中国語の数詞は計数、量詞は分類の機能を担っていて、“数量名”構造が個体化機能を有していると唱える大河内康憲 (1985)の観点到賛同し、存在表現や二重目的語文²⁾は数量詞によって修飾される名詞句が認知上最も目立った“有界”の個体であると指摘している。言い換えれば、存在文や二重目的語文においては、前景化された「図(Figura)」は“有標”であると主張している。とすると、ゼロ格の名詞句は意味上「顕著」でないとなるであろう。

木村英樹 (2012:112) では語用論の観点から存在文を分析している。時空間存在文³⁾において、数量詞による個体化機能が限界的、もしくは離散的な非連続体としての事物の「輪郭化(profiling)」に大きく貢献しているが、非限界的、非離散的な連続体の事物 (例えば「水」な

²⁾ 古川裕 (2001) では“隠現句”“結果宾语”“消失宾语”“双宾语句”“存在句”などの文構造に用いられる数量詞を対象に研究を行っている。大河内と古川の対象とする文は異なるものの、古川は大河内の観点を継承しているといえるであろう。

³⁾ 木村英樹 (2011) は“有”構文を「時空間存在文=知覚タイプの存在文」と「知識タイプの存在文」とに2分している。

ど)はその限りではないと指摘している。また、叙景的用法と新規主題設定の用法のどちらでもなく時空間存在文を用いられた場合(例6)は、所謂報告文であり、単に非既知の状況を聞き手に伝える目的とするものであると指摘している。つまり、例えば例(6)の“有电脑”は単に一種の状況に過ぎないのである。

(6) 在候车室里有电脑。你可以过去上网查查看。(木村英樹 2011:115)

駅の待合室にパソコンがあるから、ネットで調べて来るといい。(同上)

これらの観点が成立するとすれば、例(2)(5)の“有一苹果”、“明有王法，暗有神明”は顕著でないものをわざわざ報告するという効率の低い文になる。従来の観点では一部の典型的な状況(例1、3)は分析できるが、例(2、4、5)のような状況を説明するには無理がある。

3. “数量名”に関するその他の研究

3.1 “数量名”構造の特例

前節では“数量名”構造の典型例を扱う研究を集めて、整理した。ここでは「特例」とされやすい具体例に関する研究をいくつかまとめ、中にある共通点を探る。

固有名詞に数量詞“一个”がつくケース(例7、8)について、ドラゴノフ(1958:44)では、その名詞句が述語の中で最も重要な部分であり、「話し手が既に知悉しているのだが、それが新しい状況のもとで出現したと示す」と指摘している。大河内康憲

(1985:6)では「固有名詞は知らない人にとっては何の属性も内容も喚起しないが、親しい人にとっては普通名詞と比較にならない内包豊かな語である」と指摘している。

(7) 突然来了个王树理。(ドラゴノフ 1958:44)

突然王樹理さん(という人)が来ました。(筆者訳)

(8) 孟姜女走上前去说：“你们这儿有个范喜良吗？”(大河内康憲 1985:6)

大伙说：“有这么个人，是新来的吧？”

孟姜女は前に出て「ここには範喜良(という人)がいませんか」と聞きました。

皆は「確かにそういう人がいました、新入りでしょうか」と尋ねました。(筆者訳)

杉村博文(2002、2006)は王还(1985)、王慧(1997)、张伯江(2000)の研究成果を踏まえ、“个”の認知的機能を分析した。ここでは3つにまとめる。第一に、“把个 NV 了”⁴⁾と“把一个 NV 了”は異なる意味合いを持っているので、例(9)を“*小张把一个孩子生在火车上了。”のように数量詞“一”を付けると非文となる。第二に、“把个 NV 了”には「予定外・異常」の事情に対する主観的な評価⁵⁾を含め、その意味合いは量詞“个”によって喚起され

⁴⁾ 张伯江(2000:38)では例(9)の“个孩子”は非特定の人物ではなく、“说话人心中的概念实体(conceptual entity)”で、“‘孩子’这种事物”であると指摘している。

⁵⁾ 王慧(1997:232-233)では“把个 NV 了”には名詞句が[-有定]で、結果状態が“处于意外”、“超出常情、常理”なので、その文全体は“不满”、“责备”、“善意的调侃”など主観的な評価を婉曲的に

る。例(10)の“这个紙”を“这张紙”に書き換えると、「予定外・異常」の意味合いがなくなる。第三に、前述のような現象が生じたのは、通用個体量詞“个”によって名詞句の本来持つ「社会的・語彙的属性」、及び言語環境による「一時的な属性」⁹⁾が喚起されたからである。

(9) 小张把个孩子生在火车上了。(杉村博文 2002:23)

張さんは列車内で赤ちゃんを出産しました。(筆者訳)

(10) 这个紙，质量真差！(杉村博文 2006:20)

この紙は品質が悪いな！(筆者訳)

これまで分かったことを3点にまとめる。まず、“个”と“一个”は必ずしも同じ意味合いを持っているわけではなく、数詞と量詞とは別々の意味機能を有している。次に、量詞の後につく名詞は何にせよ、それで表している事物は既に話者にとって知悉の情報である。最後に、名詞が有する「社会的・語彙的・一時的な属性」は通用個体量詞“个”によって喚起される。

高橋弥守彦(2006:124-127)では、通用個体量詞“个”は普通名詞、固有名詞、抽象名詞、場所・時間名詞のほか、動詞(連語)、形容詞、副詞、擬声詞、成語などの前に用いることもでき、“个”はこれらを普通名詞として扱う機能があると指摘している。

(11) 他好奇地爬上去，想看个究竟。〈副詞〉(高橋弥守彦 2006:125)

彼は物珍しそうによじ登っていくと、とことん見てみたいと思った。(同上)

(12) 昨天晚上她们喝了个痛快。〈形容詞〉(同上)

昨晚、彼らは思いっきり楽しく飲んだ。(同上)

(13) 他们把刚插下的早稻秧，连踩带拔，搞了个稀里哗啦。〈擬声語〉(同上)

彼らは植えたばかりの、早稲の苗をめちゃくちゃに踏みつけたり抜いたりして、全部駄目にしてしまった。(同上)

例(11)から(13)では、先行研究で述べられた個体化、グランディング、顕著化、輪郭化などの観点でもって解釈できないのである。上記の3例では、“个究竟”“个痛快”“个稀里哗啦”は動詞の補語として用いられる。量詞“个”によってなんらかの属性を喚起しようとし、話者にとって“究竟”“痛快”“稀里哗啦”は知悉の情報であろう。

3.2 “数量名”の構造の発生及び文法化

表現していると指摘している。

⁹⁾ 杉村博文 (2002:24-25) では“把个 NV 了”の文は、定名詞に“个”をつけ、[-有定]の類名詞のように表現したのは、改めて新情報として紹介したいからだと指摘し、その類名詞でもって“激活社会常识或语言环境赋予的情理之中的属性”と考えられている。また、杉村博文 (2006:20) では“这个雨，看来是停不了了……”という例をあげて、目の前に降る雨の「切りなく降り続いて、鬱陶しい」という一時的属性は“个”によって喚起されているとしている。

吴雅云（2014）では“数量名”の歴史的構造変化を調べて、各時代に新たに出現した構造を表1にまとめた。

表1：吴雅云（2014:85-89）による先秦時代の“数量名”構造の考察(抜粋)

時代	新たな構造	例文
西周 时期	名 ₁ +数+名 ₂	武王戎车三百两，虎贲三百人，与受战于牧野，作《牧誓》。 彤弓一，彤矢百；卢弓一，卢矢百；马四匹。 《今文尚书》
春秋 战国 时期	名 ₁ +数+名 ₂ 名 ₁ +者+数+名 ₂ 数+名 ₂ +名 ₁ 数+名 ₂ +省略	宋人以兵车百乘，文马百驷以贖华元与郑。 孟士选圉人之壮者三百人，以为公期筑室于门外。 君有楚命，亦不使一介行李告于寡君，而即安于楚。 齐侯伐莱，莱人使正舆子赂夙沙卫以索马牛，皆百匹。 国君七个遣车七乘，大夫五个遣车五乘。 《左传》 《仪礼》
两汉 时期	名 ₁ +数+量 ⁷⁾ 数+量+名 ₁	常以岁八赐羊一头，酒二斗。 又买李又一头牛，本券在书篋中。 《前汉纪·荀悦》 《风俗通义》

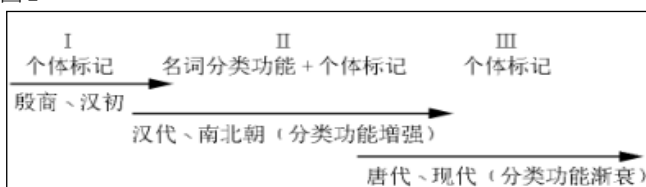
吴雅云（2014）の調査結果を整理して、次のようなことが分かった。春秋戦国時代までは“数+名₁”（例えば“二女同居，其志不同。”《周易》）“名₁+数”（例えば“彤弓一，彤矢百”）の表現が優位に立っていた；当時は例えば“匹”“两”“乘”“人”“介”がまだ名詞で、前方の“名₁”と同じ事物を表していて、その重要性⁸⁾を強調しているに過ぎない。前漢・後漢以前に徐々に“名₂”が“名₁”の前方に来る表現と“名₁”を省く表現が現れ、“个”の文法化用法も現れた。その後、漢の時代に“名₂”の位置に来る語が更に多様になって、形状を表すようになって、“名₂”が「量詞」に変化した。

ここで、現代語と関わる2点に気づく。一つめは、通用個体量詞“个”は知悉している“名₁”を意識しながら、その重要性を強調するのに用いられている。この点においては現代中国語の“个”と何ら変わらないのである。二つ目は、後から現れた量詞（個体量詞）は事物の形状を意識しているので、個体化に貢献していると言えよう。（南北朝以前の量詞に関する研究には、集合量詞、計量量詞、借用量詞などに関する内容が見当たらないので、それ以降に

⁷⁾ 秦の時代の文献は、年代判断や文献保存上に問題があるため、精密に調査することは難しいが、言語事実上、秦の時代に“名₁+数+名₂+量”が一部既に出現したと吴雅云（2014:87）が指摘している。この言語事実と学説によれば、秦の時代には数詞と量詞が使われていたと言える。

⁸⁾ 金福芬、陈国华（2002:13）は量詞の文法化を次の図のように整理している。語用的機能上では最初の量詞（“名₂”）は前方の事物を新情報のように表現して、その重要性を強調している。文法上では量詞には物質を名つける中国語の名詞の“个体标记”との機能を担っていると考えられている。また、南北朝の時代具体名詞を修飾する量詞が大量に現れて、抽象的な名詞を修飾する量詞は唐の時代に現れたとの指摘も見られる。

図2



現れた用法と思われる。)

3.3 “数量名”構造と名詞の意味範疇

前述のように、現代中国語の量詞は名詞の前に用いられ、知悉している物の重要さ、或いは個体化、類別などの側面(範疇)を強調している。さて、この節では徐烈炯、刘丹青(2010)⁹⁾に倣って、名詞の意味範疇を次の表2のようにまとめる。

表2：指示的と非指示的

類別		語例		
指示的 (referential)	総称的(generic) (類名)	例(14)老师、(15)一个人、		
	非総称的 (nongeneric)	既定(definite)	例(16)老王、(17)你、(18)她	
		不確定 (indefinite)	未特定(specific)	例(16)一个老朋友
			任意(nonspecific)	例(17)一个女朋友
非指示的(nonreferential)		例(18)教师		

(14) 教师应该为人师表。(徐烈炯、刘丹青 2010:160)

教師(全員)は人の手本とならなければならない。(筆者訳)

(15) 一个人啊，可要讲良心(徐烈炯、刘丹青 2010:143)

(一人の)人間としては、良心を重要視しなければならない。(筆者訳)

(16) 老王碰到一个老朋友。(徐烈炯、刘丹青 2010:154)

王さんが古い友人に出会いました。(筆者訳)

(17) 你可以找一个女朋友啦。(徐烈炯、刘丹青 2010:154)

あなたはもう彼女をもってもいい年ごろです。(筆者訳)

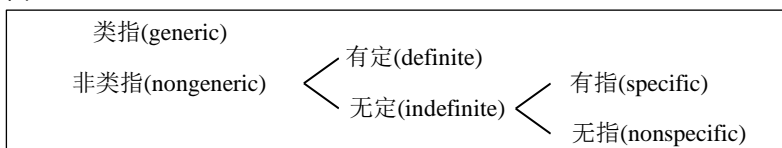
(18) 他是教师。(徐烈炯、刘丹青 2010:160)

彼(の職業)は教師です。(筆者訳)

上記の例文に下線を施した名詞(句)の具体的な意味は異なるが、単語レベルで見れば、いずれも「人間」を意味している。ところが、例(14)から(17)の下線部の語(句)は具体できな「人間」を表しているのに対して、例(18)は「職種」を表していて、「何」「什么」によって質問することができる。同じく「教師」「教师」を意味する名詞でも、例(14)は「教師」という「内包的」的な意味範疇もあれば、「職業」(例 18)という「外延的」な意味範疇もあると考えられる。即ち、指示的(referential)な名詞句は「内包的」な意味を表すのに対して、非指示的(nonreferential)な名詞句は「外延的」な意味を表しているのである。

⁹⁾ 徐烈炯、刘丹青(2010:139-155)の基本的な構造は次図3のようになる。名詞の意味の範疇についてはまだ統一的な見解がないゆえ、表2にある固有名詞の日本語訳は筆者によるものである。

図3



上述のような意味範疇の分析に基づいて、「数量名」構造と名詞(句)との組み合わせも見てみると、次のようになる。

「総称的」な名詞句は一般的には旧情報で、基本的にゼロ格名詞のままで用いられるが、場合によっては、“一个”によって修飾されるケースもある、この場合数詞“一”は「いずれか」の意味を表している。「既定」の名詞(句)は基本的にはゼロ格のままで用いられる。但し、“个”を用いて知悉している物のように伝える(例 10)用例も少なからず実在する。

(10) 这个纸, 质量真差! (杉村博文 2006:20)

この紙は品質が悪いな!(筆者訳)

「不確定」の名詞句はしばしば数量詞によって修飾される。数量詞は“一个”に限らず、適した数量詞によって修飾することができる。例えば例(16)(17)はいずれも“一位”に書き換えることができる。二例には若干の違いがある。例(16)の“一个老朋友”は未だ特定していない人物で、例(17)の“一个女朋友”は世の中に実在する任意の女性のことを指している。無論、例(6)のように、ゼロ格で用いられるケースもある。(例 2、4、5 も「不確定」の例である。)

(6) 在候车室里有电脑。你可以过去上网查查看。(木村英樹 2011:115)

駅の待合室にパソコンがあるから、ネットで調べて来るといい。(同上)

「非指示的」な名詞句は名詞の外延的意味を表していて、種類を表しているのであり、個体を表しているのではないので、基本的に数量詞の修飾を必要としないのであろう¹⁰⁾。

総じて言うと、「指示的」な名詞句には基本的に量詞が用いられるが、そうでないケースもある。それと反対に、「非指示的」な名詞句には量詞を付け加える必要はない。

4. 文中に用いられる“数量名”構造の役割

4.1 連語及び文レベルにおける数量詞の働き

従来の研究で分かるように、連語レベルでは数詞は具体的な数量を表して、量詞は事物の形状(限界・非限界、離散・非離散など)の違いを表している。(例 19)

(19) 一朵/枝/束/丛花 (高橋弥守彦 2006:119)

一輪/枝/束/群れの花 (同上)

文レベルにおける数量詞にはさらに多様な意味が生起している。例(20)の“一”は「基準、割合」を表していて、例(21)の“一”は「すべて」を意味している。熟語の例(22)が「数が多い」という意味を表している。(高橋弥守彦 2006:112~116)

¹⁰⁾ 徐烈炯、刘丹青(2010:139)では、“你想当一个英雄，我也想当一个英雄。(p.158)”“他是一个老师。(p.161)”などの“一个英雄”“一个老师”も「非指示的」な名詞句としている。けれども“一个英雄/老师”は「職柄」ではなく、“什么样的人”「どのような人間」によって質問することができるので、やはり「指示的」な名詞句ではないかと考えられている。

(20) 我一星期上十五节课。(高橋弥守彦 2006:112)

私は一週間に授業を十五コマうけている。(同上)

(21) 我已经一头白发了。(同上)

もう髪の色が真っ白になってしまいました。(同上)

(22) 别三心二意了, 就那样办吧。(高橋弥守彦 2006:116)

あれこれ迷わずに、そうしましょう。(同上)

さらに、通用個体量詞の“个”は「知悉している」事物のように、修飾される名詞に有すなんらかの属性を喚起する、或いは話し手自身の評価を込めて聞き手に紹介する場面にも用いられている。例(23)の“二三十个上海”は“上海”の「大都市」との属性を強調して伝えている。そういう意味機能は通用個体量詞にのみ見受けられているようである。

(23) 中国只有一个上海, 要是有二三十个上海就好了。(高橋弥守彦 2006:126)

中国には大都市上海は一つしかありません、もし上海のような大都市が二、三十あればよいのですが。(同上)

4.2 “数量名”とゼロ格名詞

中国語の主語は普通旧情報(背景)なので、特に限定する必要がない。計量の状況を除いて、一般的にゼロ格名詞のままで用いられる。他の文成分の前に用いられる数量詞は「焦点」の記号ではないが、文の焦点はしばしば「数量詞」によって限定されている。

楊唐峰、張秋杭(2019:78-79)による“領属主賓句”“双賓語句”に関する研究では、数量詞を名詞の範囲を限定する方法の一つとしている。例えば例(24a)の“几句”は動詞“罵”の補語であり、(24b)の“几句难听的话”は客語のように見えながらも、機能上補語と同じ機能を発揮している。よって、もし出来事にかかわる「量的」情報を補う数量詞を省いたら、例(24c)は非文となる。

(24) a. 张三骂了李四几句。(楊唐峰、張秋杭 2019:78)

b. 张三骂了李四几句难听的话。(同上)

c.*张三骂了李四难听的话。(同上)

張さんは李さんをちょっとののしりました。(筆者訳)

ところが、範囲を制限するには、数量詞の他に言語環境という手段がある。例(25b)では“小班”と特定の人物“莉莉和腾腾”は唯一性のある「社会的関係」になり、(26)では“张大爷”と“头发”は唯一且つ分割できない「全体一部分」の関係となった。

(25) a. 小班的两个孩子哭了。(楊唐峰、張秋杭 2019:79)

年少組の子供は二人が泣いています。(筆者訳)

b. 小班的莉莉和腾腾哭了。(楊唐峰、張秋杭 2019:79)

年少組の莉莉ちゃんトウトウちゃんが泣いています。(筆者訳)

(26) 张大爷白了头发。(杨唐峰、张秋杭 2019:79)

張さんの髪の毛が真白になりました。(筆者訳)

上記の研究で見ると、言語環境においては、主語と客語とが唯一性のある領属関係(社会関係・全体-部分)を意味している場合、客語には「量的」情報が既に限定され、「数」を表す数量詞は不要になると言えよう。(例 21 “一头”は「すべて」の意味である。)

また、存在表現(隠現文も含め)の“NP_{場所}+VP+NP_物”構文では、“NP_{場所}”と“NP_物”とは唯一性の持つ領属関係にあるケースは極めて少ないが、数量詞を用いない例文は少なからずある。例えば例(30)“大字报”の特定ができれば、特に数量詞は必要としないのである。

(27) 在淮海中路“大批判专栏”上张贴着批判我的罪行的大字报…(《怀念萧珊》)

淮海中路の「大批判專欄」には、私の罪状を批判した大字報〔壁新聞〕が貼り出され…(『蕭』)

尤も「限量的存在文¹¹⁾」のような事物の有無にのみ関心を払う発話場面も実在するので、そのような場合では「量的」情報もあまり必要としないのである。(例 31、32)

(28) 我上班的路上，有户人家，在屋旁长了扁豆。(《仲夏小令》)

私の通勤路には、家屋の傍らでインゲンマメを育てている家がある。(『中』)

(29) 那长方形的盘内有剪子、缝针、有牙镊、无牙镊、固定镊、持针器、蚊式止血钳、球后针头、晶体勺等等小巧玲珑的手术器械。(《人到中年》)

長方形のプレートの上にはメス、縫合針、有鉤鑷子、無鉤鑷子、固定鑷子、持針器、止血鑷子、球後針、ダヴィール氏匙などの精巧な手術器具が並んでいる。(『人』)

数量詞は焦点となる名詞(句)の範囲を「量的」側面から限定する方法として用いられる。以下の例に見られるように、数量詞を用いるか否かは、根本的には言語環境によって決められることである。談話言語学の連関性問答法により、両者の違いを見てみよう。

(30) 桌子上有什么东西? 桌子上有苹果。(種類を尋ねる文)

桌子上有几个苹果? 桌子上有一个苹果。(数量を尋ねる文)

5. おわりに

本稿はこれまで影響力のある幾つかの観点を再検討し、その中の不足や、無理のあるところを再検証して、現代中国語の数量詞を連語レベル及び文レベルからその働きを再整理し、そして数量詞の有無に関するいくつかのパターンをまとめた。とりわけ、これまでの研究では余り追究されていないようだが、通用個体量詞“个”が語彙(名詞ではなくても)のなんらかの属性を喚起する機能を有していると言う言語事実、及びその背後の歴史的原因

¹¹⁾ 金水敏(2006:13-38)では日本語の存在文を「空間的存在文」と「限量的存在文」に分けており、本稿はそれに基づいて、中国語の発話場面を二分した。

を明らかにした。

言語資料

《水浒传》《怀念萧珊》巴金 著 『蕭珊を追慕する』石上詔 訳 《仲夏小令》丁立梅 著 『中秋のうた』福井ゆり子 訳 《人到中年》湛容 著 『人、中年に到れば』柴田清伊知 訳

参考文献

大河内康憲(1985)「量詞の個体化機能」『中国語学』第232号

木村英樹(2011)「“有”構文の諸相および「時空間存在文」の特徴」東京大学中国語文学研究室紀要 第14号

金水敏(2006)『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房

高橋弥守彦(2006)『実用詳解中国語文法』郁文堂

橋本永貢子(2014)『中国語量詞の機能と意味—文法化の観点から—』白帝社

Langacker,R.W(1995) Possession and Possessive Constructions,John R. Taylor and Robert E.MacLaury(eds.),Language and the Cognitive of the World.Berlin and New York:Mouton de Gruyter

古川裕(2001)〈外界事物的“显著性”与句中名词的“有标性”—出现,存在,消失与有界,无界〉《当代语言学》4期

金福芬、陈国华(2002)〈汉语量词的语法化〉《清华大学学报》

龙果夫著,郑祖庆译(1958)《现代汉语语法研究》商务印书馆

杉村博文(2002)〈论现代汉语“把”字句——“把”的宾语带量词“个”〉《世界汉语教学》01期

———(2006)〈量词“个”的文化属性激活功能和语义的动态理解〉《世界汉语教学》03期

王惠(1997)〈从及物性系统看现代汉语的句式〉《语言学论丛》第十九辑 商务印书馆

吴雅云(2014)〈汉语个体量词“数+量+名”结构的历时形成过程〉《汉语学报》第03期

徐烈炯、刘丹青(2010)《话题的结构与功能(修订版)》上海教育出版社

杨唐峰、张秋杭(2019)〈从认知语言学视角看领属关系对领主属宾句的制约〉《解放军外国语学院学报》2019年02期

张伯江(2000)〈论“把”字句的句式语义〉《语言研究》01期